

伊東 光晴 評

年金改革と積極的社会保障政策

榎文善一著 慶應義塾大学出版会・33360円

「年金改革」が政治対立の焦点になっている。しかし、サラリーマンの多くは、自分の年金がいくらになるかもわからないし、税金まわりの細かい多引の社会保険料に不平を口にするだけだろう。政府原案の背後にある考えはどのようなものであり、なぜこのような案が作られるかを知りたいのは私だけではあるまい。

この本は、この問に答えてくれる。著者は今、もっとも注目されているこの分野の研究者。エコノミストたちと違い、基礎理論も方法論も確かである。ただし、専門外の人には難しい。

日本の公的年金は、給付水準がきめられ、それを実現するための保険料がきめられる給付建年金ではない。また保険料がきめられ、それに応じて給付水準がきめられる「拠出建年金」でもない。五年に一度の国勢調査にもとづいて将来人口推計が行われ、これにもとづいて公的年金の将来見通しと、年金財政の再計算が行われる。この時、保険料負担と給付水準の両方が議論され、妥協の土まきまの、問題が将来に延ばされていく。

こうして五年に一度の政治決着を免れる道に、厚労省はとびついた。一九九九年に導入されたスウェーデンの新年金改革である。スウェーデンのそれは、おおむね「ほかに保険料を十八・五%に固定し、一部は積立てるものの、大部分はその年度の

年金給付にあてる賦課方式で運用する」というものである。今回の政府案が年々保険料を引上げ、平成一七年度十八・三%で固定するというのが、保険料率まで対応している。(厚労省原案は二十%—政党的存在はこれを十八・三%にしただけ)

スウェーデンのそれは、保険料を固定し、給付額をそれに従って決めるというものであり、政府は、これによって増大する給付を抑えようというのである。著者の考える日本の公的年金のあるべき姿も、こうした拠出建賦課方式である。本書のメリットのひとは、こうして政府原案のバック・グラウンドを明らかにしたところにある。

その結果はどうなるか。著者はこれで公的年金論議は終焉したと云う。

たしかに厚労省は、五年に一度の苦勞から解放される。しかし、スウェーデン方式の日本への適用は、確実に年金の給付水準を引上げる。それが可能ならば終焉である。しかし、現実には強い反対を生み、税金投入という形で年金論議となっていくだろう。厚労省は逃げ、対財務省との戦いとして。

年金財政について、健康保険の破綻にどう対応するかが、来年度の課題であり、ついで介護保険の破綻が続ぎ、それぞれ合して、国民年金の問題がおこる。制度論議は終焉したのではないだろう。

この人・この3冊

水島 司・選

ガンディー



和田 誠

- ①『ガンディー自叙伝 1、2 真理へと近づくさまざまな実験』(田中敏雄訳注/平凡社・東洋文庫/各2940円)
- ②『ガンディー 反近代の実験』(長崎暢子著/岩波書店/品切れ)
- ③『ガンディーをめぐる青年群像』(内藤雅雄著/三省堂/品切れ)

年金財政に大きな影響を与える合計特殊出生率(二人の女性が何人の子を生むか)の先進各国の推移と、家族政策の相違は立派な分析であり、わが国の急速な少子高齢化社会の出現は、この分野でのわが国の無策の結果であると著者は考える。スウェーデンは、出生率の引上げに成功した。そのための社会を凌駕するために公的投資を行ったからである。

本書を讀むと、就業と出産育児を

両立できる公共政策のための投資を行うという、真の構造改革の必要を痛感する。そのための財源は、税も上げと脱税を排除する送り状つき(付加価値税)であろう。再分配効果の大きい使い方をすれば、それは必ずしも逆進的とはならないという著者の考えは正論であり、福祉国家の常識である。キラッと光る叙述が多々、政策の選択肢には問題もあるが、近

来にない良書である。